遺伝子検査情報

① ピルビン酸キナーゼ欠損症

ピルビン酸キナーゼ欠損症（欠乏症）は、遺伝性の疾患で、赤血球に含まれるピルビン酸キナーゼという酵素が不足することで十分なエネルギーを生成することができなくなり、赤血球が破壊される病気です。酸素を運ぶ赤血球の数が減少し、貧血が起こります。猫の場合、生後2～3か月齢で貧血を発症するケースが多いようです。慢性的な貧血、耳や歯ぐき･舌などが青白くなる、すぐに疲れる、食欲低下、呼吸が速いといったものが見られます。　また、検査によって、猫に心雑音、脾腫や肝腫、網状赤血球の増加、高グロブリン血症などが確認できます。しかし、猫は長期間に渡って貧血を繰り返すと、それに順応してしまうので、目立った症状が表面化しない場合があります。

② 多発性嚢胞腎(PKD)

多発性嚢胞腎は、ネコで最も一般的な遺伝性腎疾患です。　腎臓に多数の嚢胞（液体などがたまった袋状の構造）が形成されることが特徴であり、時に肝臓や膵臓にも嚢胞が発生します。腎臓に形成された嚢胞は加齢とともに数と大きさを増し、腎実質の圧迫により腎機能が低下します。多くの場合、3歳から10歳くらいまでの間に腎不全の症状が見られるようになります。

③ 遺伝性網膜変性症(進行性網膜萎縮症)

進行性網膜萎縮症は、眼球の内側を覆っている網膜が変性し網膜が徐々に薄くなり、視細胞が減少することで視覚が低下し、最終的には失明する病気です。進行性網膜萎縮症は両目で起こるため、全盲になってしまいます。人と異なり、猫の視力の低下は認識するのが難しいため、進行性網膜萎縮症はかなり進行してから気づかれることも多いです。進行性網膜萎縮症と同様に盲目の症状が現れるほかの病気も多数あります。猫の進行性網膜萎縮は非常に稀な病気と言われており、盲目がある場合は進行性網膜萎縮を第一に疑わず、そのほかの病気を含めて総合的に診断を受けることが大事だと思います。

④ 肥大型心筋症

心筋症とは、心臓の筋肉である心筋に異常が出る病気で、その中でも肥大型心筋症では左心室の筋肉が分厚くなります。心臓は心筋の拡張と収縮を繰り返すことで、全身に血液を送り出すポンプのような働きをしています。しかし、肥大型心筋症では心筋が分厚くなってしまうことで心室が狭くなり、心臓がうまく膨らめず十分な血液を送ることができなくなります。見た目には健康な猫の15%で認められたという報告があり、とても高い有病率で発症年齢も3ヶ月から17歳と幼齢から高齢の猫までとても幅広いです。短毛の雑種猫に多いと言われ、次いで長毛の雑種、性別は雄に多いと言われています。